

桃太郎のあること

伊藤清司

一

この論文のタイトルは、いうまでもなく関敬吾の高著「桃太郎の郷土」になぞらつたものであり、さらに柳田国男の名作「桃太郎の誕生」を意識したものである。

柳田は最初の本格的な昔話研究である上記の作品で、この話の主題は主人公の異常な出生にあると主張した。つまり、流れてきた桃の実からの出現、あるいは桃の実を食べた老夫婦から誕生した神聖な童児そのものがこの話のライトモティーフであつて、小童神の異常な出生を、「信じる人ばかり住んで居た世界に於て、この桃太郎の昔話も誕生したのであつた。それから以後の色々の変化は、単なる成長であり乃至老衰」（柳田 一九六一 23—24）にすぎないといきつてゐる。昔話「桃太郎」の発生をわが国固有の「小サ子」神信仰がその母胎であるという「繼承論」によつて解

こうとしたのである。他方、

「桃の実が割れて中から子が生まれたといふことは、日本以外には無いらしい……桃が川上から流れ来て其中に赤兎があり、……といふ點ばかりは鄰近民族にも其類似のものを發見せられて居ない」（柳田 一九六一 18—19）として、国内発生説を主張した。

これに対して関敬吾は、

「桃太郎昔話では主人公の異常誕生が強調され……解釈されたが、この昔話は果してこの誕生問題が中心的な理念であつたかどうかか。」（関 一九八五 A 216）と、柳田の見解ならばに師説の追従者に不満をもらし、昔話はモティーフの複合から構成されている物語であるから、「桃太郎昔話も個々のモティーフの分析だけでなく全体としての昔話が比較されなければならない。単に童児が桃から生れたといふだけでは誕生モティーフであつても桃太郎昔話ではない。」（関 一九八五 A 219—220）

と批判し、その研究方法そのものに問題があることを指摘した。

師説に対する批判はそれとして、関敬吾は柳田と同様に、「桃太郎」が近世以来、一部の有識者によつて粉飾され、文字化によつて画一化され、いちじるしく容貌を変えてしまい、そのもとの形はわれわれの目に触れるところには残っていないとみている。ただし、あとで例話をあげるが、一部の地方の農民の口頭によつて保存された昔話をあげるが、幸にして画一化を辛うじて免れたものがわずかながらあり、それらを通じて、そのもとの姿を窺い知ることができるという点でも、柳田と関の考えはほぼ一致している。問題はそ

の視点の置きどころと研究法のちがいにあつた。

関敬吾はこの昔話を構成するモティーフは複数であり、その主要なものは、

(1) 主人公の異常出生

(2) 主人公の不思議な仲間

(3) 娘の解放と結婚

の三つであるとする。関は文字化・画一化の「文化統制」からのが

れた数少ない民間の昔話の例として、岩手県紫波郡地方の、

父と母が花見に行き弁当を食べようとすると、桃の実がひとつ母の腰もとに転がつてくる。拾つて帰り寝床のなかにおくと、割れて子供が生まれる。桃の子太郎と名づける。桃の子太郎へ鳴が黍団子を持つてきてくれとしした地獄からの手紙をもたらす。地獄へ行くと鬼が黍団子を所望し、食べて睡こむ。そのままに姫をつれて逃げる。それが上に聞こえ褒美をもらつて家

が栄えた。(佐々木 一九二六 28)

同じく岩手県東磐井郡地方の、

婆が洗濯に行く。川で大きな桃を拾う。爺が鉈で切ろうとするとき、男の児がでてくる。鬼が出て悪さをするので、桃太郎は黍団子を持って鬼退治に行く。途中でキジ・サル・イヌを供にして鬼が島に渡る。相手が強くて手こずるが、鬼に酒を飲ませ酔わせて退治する。鬼にさらわれていた娘たちを助けだし、宝物をもつて帰る。(国学院 一九六八 15)

あるいは、石川県江沼郡地方の「三人仲間」

婆が川で桃の実を拾つて帰る。かなかから男の児が生まれる。力が強く知恵もあり、「打たぬに鳴る太鼓」「灰の草履」の難題を解決し、ついで「鬼の牙」をとりに鬼が島へ行く。途中、岩を蹴るとなかなか柿太郎とからすけ太郎が出現する。二人を供にする。鬼が島で柿太郎らが鬼に呑みこまれるが、桃太郎が棒を振りまわして二人を救い出し、三人協力して「鬼の牙」を手に入れる。(山下 一九三五 15)

などの昔話をあげている。岩手県のどちらの話にも桃の子の結婚について言明していないのは、児童を対象とするようになつてからの改変であり、また、石川県の話で、三つの難題を桃太郎に課したのは、おそらくもともとは被求婚者の親権者であつて、この話の後半は、難題婚譚であったろうと、関は解釈している。妥当な推論であろう。

(2)の主人公の不思議な仲間と(3)の娘の解放と結婚のモティーフを

比較的よくとどめているのが岩手県和賀郡地方の「力太郎」昔話である。

(1) 無精な爺と婆が体の垢で人形童子をつくり、こんび太郎と名づけて育てる。こんび太郎はたちまち成長し、力くらべの修業に旅立つ。

(2) 道中、お堂を担いでくる御堂っこ太郎と出あい、力くらべをして家来にする。つぎに掌で石を碎く石っこ太郎とあい、力くらべの末、それも家来にする。ある城下町で長者の美しい娘が泣いている。化物が毎月ひとりずつ町の娘を犠牲としてつれて行く。今月は私の番だと訴える。三人は特技を発揮して化物を退治する。

(3) こんび太郎は長者の長女を、御堂っこ太郎は次女を、石っこ太郎は三人をそれぞれ嫁にする。(平野 一九四三 7)

「桃太郎」の探究で柳田がほとんど問題にしなかつた(2)不思議な仲間のモティーフを、関はむしろ重視し、複合説話としてこの昔話のプロトタイプを探し求めた。そしてわが国の「桃太郎」はむしろ上掲のような(2)のモティーフを中心とした「力太郎」型から派生し独立した話であろうとし推定し、さらにその類話を海外に探りあげ、「桃太郎」の原形は「我が国で成立したものではなく」、海外より移動してきた「帰化昔話」(関 一九八五 A 219)であると結論づけた。

関敬吾はこの話型のもつとも古い記録は紀元前七世紀のギリシアの英雄伝説「アルゴナウテン」伝説であるという。その古伝説の骨

子はつぎのとおりである。

ペリアースがイアーソーンにアイアの黄金の羊皮をとつてくるようにより求める。イアーソーンは魔の船アルゴーを造り、ギリシア全土から援助者を集め。そのなかに特殊な能力をもつ者がいる。イアーソーンらは危険を冒し航海をする。アレースの畑の耕作や龍の牙刺きなど、太陽神の課した難題をその娘メーデアの協力を得て解決し、彼女と結婚する。

この「アルゴナウテン」伝説の類話は小アジアを中心にして全世界に分布しており、その東ではトルコ・インドそして東南アジアの諸島にも認められ、わが国へのひとつの移動ルートとして、中国・朝鮮半島経由が考えられ、その時期は記紀成立よりはるか以前に遡るだらうという。(関 一九八五 A 23)

関は伝來の時期を奈良時代以前と想定する根拠として、記紀の「神武東征」伝説を問題にしている。この伝説は、

イワレビコが船に乗って遠征の旅に出る。(海上の旅)途中、ウヅヒコ(シヒネツヒコ)が水先案内をし、八咫の鳥が道案内をし、そしてナガスネヒコとの合戦では金鷲が協力する。(主に公の不思議な仲間)

ヤソタケルを征伐して建国し、コトシロヌシノカミとタマクシゲヒメとの間に生まれたヒメタタライスズヒメノミコトと結婚する。(結婚)

という構成からなりたち、「アルゴナウテン」伝説とも、また「力太郎」型昔話ともモティーフも構成もほぼ一致していると主張し、

「桃太郎」の郷土は海外にあり、その成立は「伝播論」によつて説明されるべきであると強調した。

一

関敬吾は「神武東征」伝説の比較をするにあたつて、これは歴史的事件としていちじるしく加工が施され、個々のモティーフも必ずしも「桃太郎」とは一致していないが、それは両者の間におそらく十二・三世紀の時間的距たりがあり、一方は文献、しかも国家の史書に固定し、他は口承によって民間に語りつがれた結果の相違であるからだとし、たとえば、「神武東征」伝説で主人公のイワレビコの出生についてなんの説明のないことなどを筆録のせいにしている。

「神武東征」伝説を「桃太郎」の原形と想定される説話の歴史的改変とみなす関説には替否両論があろう。客観的な比較資料が乏しいのはなによりの問題点である。たとえば、イワレビコとイスズヒメとの結婚は「アルゴナウテン」型伝説とされているこの東征伝説に本來的に備わっていたモティーフの歴史化であった証拠があるのか。また、関が主人公の不思議な仲間であると理解しようとしているカメ（ウヅヒコ）・ヤタカラスについては、別にこれは熊野のクマとともに、海・陸・空の三界を統治する普遍王としての天皇を象徴的に示すシンボリズムとするなど、違った解釈も可能なのである。（大林 一九七五 171—172、249）またイワレビコの出生について格別な説明のないことを、関は、この種の昔話では、主人公の叙述は

きわめて簡単であるのが常であるからといい、しかも十五歳で皇子になつたという記事に異常誕生モティーフを読みとろうとするのはいささか牽強付会ではないか等々。これらの点は関説の支持者にしても疑問として残るであろう。

柳田国男は「桃太郎の誕生」の前半で多くの紙面を割いてわが国の「糠福米福」や「歌う骸骨」をとりあげ、世界的に分布している「灰かつぎ姫」や「死人感謝」譚の系譜をひくことを指摘し、民間説話の移動について読者の喚気を促しながら、「桃太郎」の場合は一転して神話や固有信仰からの「繼承論」に終始しているのは意外というほかない。柳田が「繼承論」にこだわつたのは、わが国には古くから白蘞の皮の舟に乗つた小男神スクナヒコナや、チヤコバ 小子部ノスガル、あるいは「一寸法師」・「瓜子姫」・「かぐや姫」など、「小サ子」・神の物語がことのほか多いという事実に注意してのことであり、しかも前述のように、桃の実から誕生する「小サ子」の例は隣接する国々には見あたらないという認識からであつた。

しかし、朝鮮半島についてはここでは描くとして、わが国の文化に大きな感化をもたらした中国大陸にも「小サ子」の物語はたくさんあり、しかも、それら小童の出生は果樹あるいは果実を母胎とするものが少なくない。そればかりではない。各種の果実のなかに、おいおい具体的な例を示していくが、桃とする話もあり、その実から誕生した英雄譚も語られている。「桃太郎」はわが国土のなかだけで云々すべき説話ではなく、わが國のそれはひとつの方オイコタイブともいうべき存在にすぎない。その点では関説に左袒できる。

ここでふたたび関の「桃太郎の郷土」にたち入る。関はこの話型のわが国への伝播ルートとしてあげた中国・朝鮮の類話はつぎの話である。まず、中国雲南省の昔話。

児のない年寄り夫婦が白髪の老人から貰つた丸薬を呑むと九人の男の児が生まれる。それぞれ力持ち・食いしん坊・腹いっぱい・打ってくれ・長脛・寒がりや・暑がりや・斬ってくれ・水ぐりと名づける。兄弟は顔がよく似ている。王宮の龍の柱が折れる。力持ちが改修するが王が信用せず、試しに大飯を食わせる。食いしんぼうが代わってたいらげる。王は樋に入れて餓死させようとする。腹いっぱいが代わって七日七晩、牢に入つたまま平氣でいる。呼び出されて打たれることになる。打つてこれが代わりに叩かれた末、谷底に墜される。長脛が行つて打つてくれを助けだす。王は彼を焼き殺そうとする。寒がりやが行つてむしろ喜ぶ。王は雪で凍え死にさせようとする。暑がりやが行き、喜んで雪のなかに埋まる。王は彼を斬り殺すことにする。斬つてくれが行く。仕方なく王は水のなかに捨てようとする。水ぐりが代わつて行く。(中国作家協会昆明分会 一九六二 62—64)

つぎに朝鮮半島の類話「四巨人（四人の大男）」

児のない男が便所で赤ん坊を拾う。たちまち成長し力持ちになる。戦さが始まり、彼は鼻息で樹木をゆるがす荒息の大男・熊手で山を崩してしまった熊手の大男・大量的の糞尿をたれる大男と仲間になつて出征する。糞尿の大男が小便で敵兵を溺らせ、荒

息の大男が鼻息で洪水を水らせ、熊手の大男が熊手で敵兵の首を擰きおとして勝つ。四人は宝物を手に入れて帰る。(孫一九三〇 258—261)

両話とも不思議な仲間モティーフが中心に据えられ、それに主人公たちの異常出生が語られている。ただし、妻覓[#]ぎのモティーフを欠いている。また、関が「アルゴナウテン」伝説と「神武東征」伝説を結びつけるうえで重視した旅行、とくに航海の要素はともない。

ところで、関敬吾は「桃太郎の郷土」の発表を遡ること三十七年前の昭和十年に「犬と猫の指環説話比較研究」を執筆し、わが国にも伝承されているグリムのいわゆる「忠実な動物」の比較を試みてゐる。これはわが国における本格的な比較研究の先駆的論文である。その後、類話が日本各地から報告され、また荒木博之の論文などによつて、関の着眼の正しかつたことが実証されつつある。

さて、その論文の結末で、関は、

……我々の僅かな例を以て何らかの結論を引き出すことは現在の私には不可能であり、……また遠い過去の説話移動の問題を僅かの資料を以て断ずることも甚だ危険である。(関 一九八五B 12)

と、述懐している。この論文を執筆した当時の昔話研究のおかれた環境、とくに研究者としての関のおされた立場と昭和四十七年当時のそれとの相違を考慮にいれる必要があるが、この昭和初期の論文の結論はその慎重な言辞にかかわらず、私の印象としては、「桃

太郎の郷土」よりも、むしろ比較の精度では高く、「帰化昔話」の色彩がはるかに鮮明である。

関はわが国の昔話研究を深めるにつれ、比較研究の必要性をますます痛感していった。そして「桃太郎」の比較にはかなりの自信をもつようになり、それゆえの結論であつたと思われる。しかし、この論文での断案をめぐって気がかりな点は、関自身が、

しかし、私が所有する「東アジアでの一引用者注」資料ははなはだ少ないが、実際的にもヨーロッパにくらべて採集は少ない。

(関 一九八五 A 230)

と、告白している資料の質量両面にわたる弱点である。「移動論」によつて「桃太郎」の成立を説き、中国・朝鮮をそのルートであるとして、従来の師説を退ぞけるにしては、上掲のわずか二つの類話だけでは説得力に富むとはいえず、印象としては結論に飛躍がないとはいえない。

三

すでに触れたように、中國大陸にも「小サ子」説話が多い。なかでもその出生を東瓜^{トウガ}・瓢箪や各種の果実などのなりものから語るものがあるのは「桃太郎」との比較から関心がもたれる。例話としてまず、山東省崂山地方の伝承の「棗核兒(ナツメツ子)」をあげる。

児のない老夫婦が月餅の餡のナツメを食べようとすると、実の

なかから小さい児が出現した。そのナツメツ子は罪のない人びとをいじめる悪代官の口のなかになび込んでさんざんあばれまわつて懲しめた。ナツメツ子はりっぱな若者に成長した。(劉子)昔話である。

一九六五 119—120)

つぎは「蘋果郎(リンゴ太郎)」。伝承地は具体的に報告されていないが、おそらく江南地方と推定される。

四十すぎても李夫婦は子に恵まれない。李はある日、谷川へ行くと、白髪の老人が現れ、懐からリンゴの実をひとつとり出して与えた。家に持ち帰り、庖丁で切ると、かわいらしい男の児がとび出た。リンゴ太郎と名づけた。リンゴ太郎は一ヶ月もたたないうちに二十歳ぐらいの若者に成長し、旅に出た。山の中で日が暮れ、草叢に横になつて寝ていると、例の老人が現われて小石を与える。願えば助太刀をしてくれる力持ちの二人の女が出てくるという。リンゴ太郎はその魔法の石を懐に旅を続けて、やがてある国に辿りついた。

ちょうどそのとき、国王の公主が暴風にさらわれ、連れ戻した者には褒美として公主を嫁に与えると、国王がお触れを出していた。リンゴ太郎は小石で二人の大女を呼び出し、公主救助の協力を命じた。力持ちの女たちは某國の険しい山頂の洞穴に、妖蛇によつて閉じこめられていた公主を助け出した。リンゴ太郎と公主は大安吉日を選んで結婚式をあげた。(王 一九四一

果実からの誕生・旅行・不思議な仲間・妖魔退治そして解放した娘との結婚——関敬吾が「桃太郎」のプロトタイプと想定した主要な構成モティーフのすべてを備えている。リンゴの実が桃の実とちがうだけであり、しかもリンゴを谷川に赴いたときに手に入れるというのは、うますぎるくらいに「桃太郎」に似ている。これだけを見ても「桃太郎」はわが国独特の昔話であるとは考え難くなつてくる。しかも、中国には主人公を桃の実から生まれたとする話も伝えられている。つぎの「八兄弟」もそのひとつ。

夫婦に子がない。夫が悪辣な大地主に殺された。妻が泣いていふと、白いハトがやってきて、裏の桃の木のいちばん赤い実を食べるようになると教える。そのとおりにして、妻は八人の男の児を産んだ。長男を初入りと名づけ、以下、石滑り・堅首・柔か首・熱さ知らず・呑んべえ・足長・大喰いという名前をつけた。

八人兄弟は父の仇をとりに大地主の屋敷に行つたが、逆に初入りが捕えられて牢にぶち込まれ、大きな石で押し殺されることになつた。石滑りが兄に代わる。石が滑つて殺すことができない。

仕方なく大地主は打ち首にすることにした。三男の堅首が入れ代わり、討ち首も徒労におわつた。以下、大地主はつぎつぎに処刑方法を変えるが、そのたびに柔か首・熱さ知らず・呑んべえ・足長の兄弟が交替して相手を慌てさせた。最後に大地主が海に放り込んで溺死しない足長に、飯を十万杯無理やり食べさせ悶絶死させようと企てるが、娘はいわれたとおり、産んだ桃の子を家に持ち帰り

りと平らげてしまつた。大地主はたまげて、これでは米倉が空っぽになつてしまふから「帰つてくれ」と頼むと、大喰いは屋敷の高い屏にのぼつて尻をまくると、十万杯の糞をたれた。大地主の屋敷のなかは糞の海となり、家族も手下もみな溺れて死んだ。(黄一九五六)

45—49

つぎの雲南省大理喜州で採集された白族の「金龍報仇」(金龍の仇討ち)も主人公が桃の実から誕生した昔話である。

貧しい家の娘が地主のもとで働き、毎日、谷川で洗濯をしていた。川上から桃の実がいくつか流れてきた。ひとつ拾つて食べて、ほどなく赤ん坊を産んだが、手からこぼれて谷川へ落としてしまつた。その後、娘はつぎつぎに桃を拾つて食べて子を産んだ。しかし、そのつど手からこぼし、水に落としてしまつた。九つ目の桃が流れてくだつてきたとき、水の神さまが娘に、「今度産んだら手から落とさず大事に育てるがいい」と教えた。娘はいわれたとおり、産んだ桃の子を家に持ち帰り

養つた。桃の子は七・八歳でもう背も高く、体つきもりっぽで、しかもたいへん聰明であつた。

ある日、金持ちの息子たちがしきりに桃の子に嫌がらせをしたり、喧嘩をふつかけたりした。あまりの仕うちに、桃の子が地主の息子を軽く打つたら死んでしまつた。

以下、物語はつぎのように展開している。桃の子は母親を背負つて村を逃げ出し、途中で喉が鳴き、川岸に腹ばいになつて水を飲んだが、飲めば飲むほど喉が鳴き、大河の水まで飲みつづけた。すると桃の子は見る見る金色の龍に変わり、波のなかに姿を消した。

この金龍は神通力を発揮し、大洪水をおこして、金持ちの家屋敷・土地・財産のいつさいを押し流してしまつた。(趙一九
五九 117—119)

最後に悪者退治の話があるが、後半は「桃太郎」とは違つた展開になつてゐる。おそらく、わが国の十和田湖地方にも伝承されている「八郎太郎」伝説のような龍蛇化生モティーフとの複合説話であり、妻覗きの要素はその結果欠落したのではないか。

貴州省黔東南地方の苗族の昔話は桃の実から異常な誕生と成長、その主人公の活躍、そして妻覗きのモティーフも含まれている。題して「桃李哥和魔法師的女兒（桃の子太郎と魔法使の娘）」

二軒の家の地境に生える桃の木に、ある年並はずれて大きな実があり、それが落ちて、なからひとりの男の児が生る。桃の子太郎と名づけられ、両家の人に育てられ、りっぱな若者に成長し、川のほとりの野原で牛の放牧をして働いていた。向

こう岸で洗濯をする美しい娘と恋唄を歌いあう仲となつたある日、娘が流した一枚の絹の布が橋に変わつた。桃の子太郎はその橋を渡つて娘のそばに行き、いつしよに娘の家に出かけた。さて、娘の父親は人殺しの恐い魔法使であつた。暗くなつて帰つてくると、いきなり「人の気配がする」という。娘はつみかくさず桃の子太郎のことを話した。魔法使は「部屋を掃除し、その男を泊めろ」といつた。娘は父の魂胆を見ぬき、父の降魔衣を盗み出して、桃の子太郎にそれを着て寝るようにと渡した。夜半、果して妖魔たちが現われ、桃の子太郎を喰い殺そうとするが、降魔衣のため近づけない。

翌朝、元氣な桃の子太郎に驚いた魔法使は、山に野焼きに誘い、まわりから火を放つて焼き殺そうとする。魔法使の娘が小鳥に変身し、カニをとり出して穴を掘らせ、二人はその内に入つて助かる。翌朝、桃の子太郎の姿を見て意外に思つた魔法使は樹木の鬱蒼と生える山にアワを時くから、まず木を全部伐り倒せと命じる。ふたたび娘が現われ、呪術をつかつてたちまち伐り倒し、のこらざ焼いてしまつた。魔法使は驚き、「明日、三斗三斤三合のアワを時け」と命じ、その翌朝にはそのアワを一粒残らず拾い集めろ」と難問をふつかけた。桃の子太郎はまだしでも娘の協力でその難題を果した。舌を巻いた魔法使は今度は「家の裏の竹林の竹を伐れ」と命じた。娘は「あれはみな大蛇です。伐る前に藤蔓で縛るように」と教えた。おかげで桃の子太郎は噛み殺されずにすんだ。

わが国のオホクニヌシの試練譚とよく似た構造の物語であり、この点については稿を改めるが、危険な魔法使のもとから逃げ出し、二人はめでたく結婚する結末部も、スサノヲの魔の手からのがれたオホクニヌシがその娘のスセリビメと結婚するエピローグと大筋で一致している。

桃の子太郎は娘にいわれたとおり、魔法使のもとにある呪傘を盗み出して無事、天空を飛んで逃げた。しかし、娘の注意したタブーを破つたため、大きな音とともに彼は地上に落下した。その音に眼を醒ました魔法使は二人が逃げたことを知り、魔法の矢を射かけたが、娘の協力で、追跡からのがれることができた。(謝 一九六四 20—23)

この話は「八人兄弟の仇討ち」の不思議な仲間モティーフに入れ替わって、桃から生まれた小童を主人公にした「難題婿」の昔話である。当然、結尾は結婚のモティーフとなっている。

関敬吾は「桃太郎」昔話の求婚難題的側面に注目していた。すでに述べたように、関は石川県江沼地方の「三人仲間」も本来は「求婚難題」譚であったと見ている。この型の説話で難題を求婚者に課すのはもちろん被求婚者の親権者父親ときまつているが、各種の難題を求婚者自身が独力で解決するのでなく、必ず第三者の協力をまつて結着するのがおおむねこの型の物語の定形である。上掲の石

四

川県の「三人仲間」の奇妙な柿太郎・からすけ太郎がこれに該当する。しかし、多くの場合、協力者はたいてい被求婚者自身ときまつている。オホナムチがスサノヲから課せられた試練の克服に協力したのはスサノヲの娘スセリビメであつたのはそのひとつの中である。このように見てくると、関があらかじめ(1)異常出生、(2)不思議な仲間、(3)結婚のモティーフから構成された内容をもつて「桃太郎」のプロトタイプだと考えた説話と(1)異常出生、(2)難題婿、(3)結婚の主張モティーフから構成されている苗族の「桃の子太郎と魔法師の娘」とは、主人公への協力者を被求婚者以外の第三人者とするか、それとも被求婚者自身とするかによって自在に相互移行する位置関係におかれている。石川県江沼地方の「三人の仲間」の昔話はいさか歪曲づいたが、この両者の中間項に位置するミッシングリンクである。「桃太郎」の原形の中心的モティーフが関のいうように「不思議な仲間」であつたのか、それとも「難題婿」であつたのか、その吟味は今後多くの資料の採集報告を得て進められていくであろうが、「桃太郎」のプロトタイプを問題とするうえで、やはり、この物語の主人公の出自を軽視することはできない。関は「桃太郎」の原形を論じたなかで、

他の民族の「この型の——引用者注」昔話では主人公の叙述は極めて簡単である。(関 一九八五A 223)

と述べて、主人公の異常出生モティーフをそれほど重視していないが、冒頭で紹介したとおり、その点は柳田は対照的で、「小サ子」にあくまで固執した。そのことは決して意味のないことではない。

わが国の「小サ子」信仰の対象とされた小童の神々がつねに果実から出現するのではなかつたから、柳田は昔話「桃太郎」の発生を探求するに当つて、一義的に桃の実そのものに拘泥することをナンセンスと考えた。それまでの「桃太郎」研究者は、たとえば黄泉の国を訪れたイザナキノミコトが追つてくる黄泉醜女^{よもつしきめ}を黄泉比良坂^{よもつひらさか}の桃の樹の実をもつて撃退したという記紀の説話がほかなぬ昔話「桃太郎」の素材であるなどと、桃そのものに関する記事を和漢書を渉猟にして探し出すことに没頭していた。こうした態度に嫌気をさした柳田は、

少なくとも桃を主眼とした桃太郎研究が詮無き辛勞であつたことはもう明かになつて居る。（柳田 一九六二 36）

といい、さらに、

桃の話ばかりを搜して見ようとしたのが玄同放言と其隨喜者たちであつた。そんな比較などして貴はぬ方がよっぽど好かつた。

（柳田 一九六二 21）

今までいつて、曲亭馬琴以来の研究態度を論難している。そしてモモ太郎のモモとはもともと人間の股^{もも}ではなかつたか、という高木敏雄の仮説に関心を寄せたのも、桃の実拘泥論者に対する反感からであつたかもしれない。

柳田が桃の果実に注目したのはあくまでも「小サ子」の異常出生説話を前提にしてのことであつた。そのうえで、「小サ子」が桃の実のなかから出現する話はわが国の「桃太郎」以外にはないらしいことを理由に「桃太郎」の郷土は日本の国内にあると考えたのである。

しかし、桃の実からの出現する「小サ子」の話は中国大陸にもあり、日本の国産だとはきめかねる。むしろ、桃は中国では古くから仙木とされ、邪氣を伏せ百鬼を殺す呪力があると信じられ、門上に桃の木符をかけ、地面に桃の木の杭^{ハシ}、桃櫛^{ハシ}を打ちつけるなどの民俗が盛んに行われ、その実（桃子）は生殖力のシンボルとして嗜好され、回春の薬物ともされてきた。とくに漢方では桃の実の核のなかの仁を桃人と呼んで愛好してきた。中国大陸こそ桃の実から異常児が誕生する説話が生まれるのにふさわしい土地柄であった。それににより桃はわが国の原産ではない。一説には黄河上流地方が原産地ではないかとされているが、いずれにしろ、桃はわが国には大陸から移入された。「桃太郎」の原形もまた移入昔話であつたとみるべきであろう。

ところで、われわれが郷土という場合、なにに基準にするか。それは一般には生まれ育つた土地をさし、单なる誕生の地ではない。一定の期間、人間形成を行なつた環境であり、親戚・従兄弟姉妹の住んでいる土地である。そして多くの場合、故郷ともいい換えられ、幼少期にかつて住んでいた土地を意味している。「桃太郎」の郷土を問題にする場合も同様に、桃の実から誕生した異常出生児が異常な成長をとげて対立する障害に打ち勝ち、やがてめでたく結婚する物語が育てられた土地とするならば、まずは中国大陸こそ「桃太郎」の故郷であつたと見るべきである。それが古代ギリシアの英雄伝説までどれほど遡れるかは、中国大陸の西方世界に、同じような桃の実を母とする異常出生児の英雄説話がどれだけ探しられてられる

かにかかっている。くり返すことになるが、「桃太郎」の故郷とはあくまでも桃の実から出現した桃の子太郎が生まれ育つた土地である。物語の主人公の不思議な出生や経歴があまり問題にされないような説話の誕生地は「桃太郎」の遠い祖宗の故郷ではあつたとしても、「桃太郎」自身の故郷であるとは必ずしもいえない。

(注) 上掲の『紫波郡昔話』のなかの花見中の女房の腰のもとに桃の実が転がつて来て云々の話などに力づけられての発言であるが、ただし、高木自身は同じ「英雄伝説桃太郎新論」(増訂日本神話伝説の研究(2))一九七四 平凡社東洋文庫189—195 所収)のなかで、引き続いてこの問題を論じ、「桃と股との国音の一一致は要するに偶然の一一致」であると上記の見解を否定し、生殖のシンボルとしての桃の実の意義を重視すべきであるといつている。

引用文献

- 平野 直 一九四三 『すねこ・たんぱこ』 有光社 7
国学院大學民俗文学研究会編 一九六八 『伝承文芸』 6号 岩手県南昔話集 国学院大学民俗文学研究会 105
大林太良 一九七五 『日本神話の構造』 弘文堂 171—172、249
佐々木喜善 一九二六 『紫波郡昔話』 郡土研究社 28
関 敏吾 一九八五 A 「桃太郎の郷土」(関敏吾著作集4 日本昔話の比較研究) 同朋舎出版 216、219—220、223、230、233
リ リ 一九八五 B 「犬と猫と指環説話比較研究」(関敏吾著)

作集4 同朋舎出版 12

山下久男 一九三五 『加賀江沼郡昔話集』 小川書店 105

柳田国男 一九六二 「桃太郎の誕生」(定本柳田国男集 卷) (筑摩書房) 18—19、21、23—24、36

孫 晉泰 一九三〇 「四巨人」(朝鮮民譚集) 郷土研究社 258—264

黄湘林 一九五六 「八兄弟」(中国民間文芸研究会 民間文學編輯委員会編 『民間文学』一九五六年一期 人民文学出版社) 45—49

劉思志 一九六五 「棗核兒」(『民間文学』一九六五年一期) 119—120

王 忱石 一九四一 「蘋果郎」(王編『民間故事』上 第一集 上海経緯書局) 65—70

謝 馨藻 一九六四 「桃李哥和魔法師的女兒」(中国科学院民族研究所少数民族社会歴史調査組・中国科学院貴州分院民族研究所編『苗族民間故事集』同上研究所刊) 20—23

趙澄相 一九五九 「金龍報仇」(李星華編『白族民間故事伝説集』人民文学出版社刊) 117—119
中国作家协会昆明分会 一九六二 「九兄弟」(同上編『雲南民族民间故事選』雲南人民出版社刊) 62—64 なお、関敏吾はこの伝承を四川省伝流のものとして引用しているが、それは誤りであつて、正しくは雲南省の彝族のものである。

(いとう・せいじ／杏林大学)